祈りのきずな　9月

士師記19章～サムエル記上23章

秋田教会（秋田）牧師　村上　悦二（むらかみ　えつじ）

1日（日）士師記19章27～30節

「**イスラエルに王がいなかったそのころ**」（1節）とあります。主のみ言葉に立ってその民を導く指導者を欠いた創世記19章のソドムで起きたような悲惨な出来事です。自分の姿に気づかず、人を告発する姿を見つめさせられます。立ち止まり、主なる神のみ心とみ言葉に従う生活を取り戻す大切さを憶えます。

多摩ニュータウン・憩いの家教会　※2024年5月12日の礼拝をもって加盟教会としての働きを終了。以後、単立教会として活動します。

2日（月）士師記20章26～28節

一人の女性が死に至る非道な事件が、イスラエルの内戦を引き起こします。相手だけに非道を認めさせようとすると争いが起こります。自（みずか）らの罪に嘆（なげ）き悲しむ者が、主の救いの福音を味わうことができるのです。み前に進み出て、み心を問う者に主は失敗すら与え、そこに知恵を与え、み心を示されるのです。

多摩みぎわ教会と石井規之（のりゆき）牧師（東京・多摩市）

3日（火）士師記21章25節

忌まわしい事件に端を発したイスラエルの部族間の内乱の結果、12部族のうちの1部族の存立の危機に瀕（ひん）し、うわべを取り繕（つくろ）うことに終始する姿を「…**自分の目に正しいとすることを行っていた**」と総括します。自分たちの誓いが傷つけられないことを優先し、主のみ心を尋ねない有様が浮き彫りになります。

立川教会と文延翼（ムンジョンイク）牧師、大川博之名誉牧師（東京・立川市）

4日(水)ルツ記1章16〜17節

夫と二人の息子に先立たれたナオミは、食糧を求めて約束の地から異教の地に移ったことを悔い、主のもとに立ち帰る決断をします。嫁ルツはしゅうとめナオミに対する労(いた)わりと責任を通して、ナオミが仰ぐ神に引き寄せられます。困難な道に立ち上がる決断には、背後で主の恵みが備えられているのです。

花小金井教会と藤井秀一(しゅういち)牧師、中根浄(きよし)牧会スタッフ（東京・小平市）

5日(木)ルツ記2章11〜13、20節

ボアズ、ルツ、ナオミの三者三様の信仰と賛美が記されています。時と場所、立ち上がる人と迎える人の出会いと交わりに神さまの備えを憶えます。私たちもまた、主なる神のみ心、み言葉そのものである主イエスに出会い味わうこと、主イエスに連(つら)なる人との出会いと交わりを大切にしたいものですね。

府中教会と長尾なつみ牧師（東京・府中市）

6日(金)ルツ記3章10〜13節

生きておられる主が歩むべき道を開いてくださるまで、必要なことを果たして待つボアズの信仰と祈りが表されています。ナオミもルツも同じでした。それぞれが勝手気ままにうごめく士師の時代においてこそ、このような主を崇(あが)めつつ委ねて生かされる姿が生き生きと映し出されるのではないでしょうか。

調布教会と岡田千尋(ちひろ)協力宣教師（東京・調布市）

7日(土)ルツ記4章13〜17節

ナオミとボアズとルツのもとに生まれたオベドの孫に後のダビデ王が生まれたと記されています。ナオミとルツのどうやって生きていけばよいのか分からない過酷な生涯、自分を捨てナオミとルツに仕えたボアズの生涯、主のみ心を求めつつ互いに仕え合い築き上げた小さな家庭が、救いの祝福にあずかっています。

調布南教会と前田重雄牧師（東京・調布市）

８日（日）サムエル記上１章21～28節

「**ハンナは悩み嘆いて主に祈り、激しく泣いた**」（10節）と言います。子どもが与えられることの意味が変えられ、表情（つちか）が一変します。悩みや嘆きが主に向けての祈りを起こし、信仰を培います。子どもが与えられる確信、子どもをささげる決断を通して、祈りのうちに主への信頼に生かされる恵みをもたらします。

仙川教会と山岸明牧師、井馬（いま）佐紀子副牧師（東京・三鷹市）

９日（月）サムエル記上２章１～10節

嘆き悲しむ者に対する主のみ業を賛美するハンナの祈り、息子サムエルを支える母ハンナの姿が記されます。一方、主に仕える者とされた恵みを軽んじた祭司エリの姿、その息子たちの目に余る行状が現わされます。主を重んじる者と軽んじる者の悲喜こもごものうちに、主の遠大なご計画は果たされるのです。

三鷹教会と秋山献一牧師（東京・三鷹市）

10日（火）サムエル記上３章10～15節

サムエルが主に呼びかけられ、み言葉に聞いて、受け入れる姿勢を整えられます。母ハンナにとっては祈りの成就ですが、祭司エリにとっては自分に替わる後継者の出現です。サムエルにとっては痛みを伴うものでしたが、隠し立てせずエリに語り、祭司エリに仕える者から主に仕える者へと変えられたのです。

中野教会と坂元俊郎（しゅんろう）牧師、坂元幸子（さちこ）協力牧師（東京・中野区）

11日（水）サムエル記上４章１～３節

主に対し問いかけはするが、主のみ心を求めないイスラエルの長老たちは、主の契約の箱を戦いの勝利のために利用しようとしますが、逆に自分たちの敗北を招き、主の箱は奪われます。主のみ言葉に耳を傾けそれに従うところに主の栄光が留まり、その信仰に応えて恵みをもって主は働いてくださるのです。

大久保教会と河野（かわの）信一郎牧師（東京・新宿区）

12日（木）サムエル記上５章11～12節

主を恐れ叫び求めたのはイスラエルではなく、偶像を造っていたペリシテ側でした。自らが引き起こした敗北の悲しみの中で、問いかける気力さえ失ったイスラエルの民との交わりを回復するため、主は主の箱を用いて働かれたのです。私たちは主に支えられて生かされていることを忘れてはなりません。

花野井教会と古賀公一牧師（千葉・柏市）

13日（金）サムエル記上６章19～21節

起こされている災いを目の前にして、主の箱にどう対処したらよいのか。戦いに勝利したペリシテも敗北したイスラエルも迫られ、どちらもただ災いから逃（のが）れることだけに終始します。主は万民の神として、すべてはご自身のみ手の中にあることをそれぞれに示し、自身の姿を見つめさせようとされるのです。

栗ヶ沢教会と木村一充（かずみつ）牧師（千葉・松戸市）

14日（土）サムエル記上７章３～６節

主の箱がイスラエルに安置されて20年後、転機が訪れます。主を慕い求めるイスラエルの思い、偶像を捨てて主にのみ仕える姿、主に助けを求める祈りが起こされます。主によって選ばれ、民の痛みを執り成すサムエルを用いて、主はご自身への信頼に固く立つイスラエルの霊的な回復をもたらします。

富里（とみさと）教会と武井誠司牧師（千葉・富里市）

15日（日）サムエル記上８章６～９節

二人の息子の不始末に対する民の指摘と、王を頼りにし神に頼らない体制への民の要求に戸惑うサムエルは、民との間に亀裂が生じます。ご自身が召された民が他国の民と同じように要求するその心を見透かし、主は自分たちが望む王の奴隷とならないよう、奥深いご計画を起こし民を守られるのです。

茂原（もばら）教会と塩山宗満（むねみつ）牧師（千葉・茂原市）

16日（月）サムエル記上９章14～17節

人間的に申し分ない力強い自分たちの王を求め、主に期待せず王に期待するイスラエルの民に対して不快感を表すサムエルは、それでも主が選ばれた王としてサウルを受け入れ、主の働きに委ねるのです。私たちの立てる計（はか）らいの背後にあって、主が忍耐と憐みをもって主のみ心を果たされるのです。

千葉教会と元川信治（もとかわしんじ）牧師、澤田ルツ子音楽主事（千葉・市原市）

17日（火）サムエル記上10章17～19節

サウルが思いがけずイスラエルの王に選ばれます。民は喜び叫び、祭司サムエルは民の不信仰を指摘したうえで主が選ばれた王としてサウルに油を注ぎ、サウルは主の霊が降（くだ）り別人のように新しくされます。主のみ心は隠されたまま主に従えという、主の恵みの無限の可能性と厳しさをも思わされます。

木更津（きさらづ）伝道所と高市和久牧師、井本義孝協力牧師（千葉・木更津市）

18日（水）サムエル記上11章６～７節

サウル王の即位後、アンモン人の侵略を受け侮辱（ぶじょく）を受けます。すると主の霊がサウルに降り、イスラエルの民は主への恐れにより一丸となって戦うのです。主の霊がサウルを燃やし、主のための主による戦いにより王国が築き上げられていきます。主によって器が起こされ、その賜物がみ業に用いられるのです。

千葉・若葉教会と牧瀬博幸牧師（千葉・千葉市若葉区）

19日（木）サムエル記上12章20～25節

イスラエルの民が身の危険に迫られたとき、主なる神を求めず人間の王を求めたことに主は悔い改めを迫ります。サムエルは告別の言葉として、「**主を畏れ、心を尽くし、まことをもって主に仕えなさい**」と語ります。私たちの身勝手な不信に対する主の赦しの繰り返しと同時に、ご愛の広さを憶えます。

津田沼教会と大塚恭一（きょういち）牧師（千葉・習志野市）

20日（金）サムエル記上13章13～14節

サウルは民の離反や外敵の襲来の恐れから、主からなすべきことを告げられるまで待つことができなかった。主によって民が守られることより、サウル自身が民を守ろうとしたことにより将来を否定されたのでした。人に頼ることから抜け出すことができず、主が備えられた恵みを受け取り損ねる人の姿です。

船橋教会と松田裕治（ゆうじ）牧師、三ツ木茂名誉牧師（千葉・船橋市）

21日（土）サムエル記上14章６～10節

大軍を前にしたサウル王とその息子ヨナタンの戦う姿が対比されます。民の動揺など目に見える状況と形に目を奪われるサウル、主だけを仰ぐヨナタン。絶対的な劣勢の中で、無謀とも思えるヨナタンと従卒の二人だけの戦いがペリシテ軍の混乱という主の働きを呼び込み、み心のみが人を用いて果たされます。

市川大野教会と富田愛世（まなせ）牧師（千葉・市川市）

22日（日）サムエル記上15章22～23節

厳しい主の峻厳（しゅんげん）さに、サウルの神に対する信頼が問われます。主のみ言葉を疎（おろそ）かにし、戦利品を惜しみ、主に栄光を帰することなく自らの戦勝碑を建てる、主に問われれば面目（めんぼく）を保つために弁明に終始するサウルの姿です。人を恐れず主を畏れ、砕けた魂をもってみ言葉に聞き従うことが主の喜びです。

市川八幡教会と吉髙叶（かのう）牧師（千葉・市川市）

23日（月）サムエル記上16章７節

イスラエルの王位がサウルからダビデに移る経緯が記されています。サウルは民が求めた王、ダビデは「**主は心によって見る**」と言われて主が求めた王です。ダビデの心が認められたからではなく、ダビデが主に愛されたのです。人の目には隠されていても、主のご計画は絶妙に果たされていくのです。

篠崎教会と川口通治（みちはる）牧師（東京・江戸川区）

24日（火）サムエル記上17章45～47節

青銅の兜（かぶと）と鎧（よろい）とすね当てと槍を身につけた大男と五つの石と投石袋と石投げ紐をもった少年が対峙します。主を蔑（ないがし）ろにする者と主の名によって闘う者、現実に目を奪われている者と主以外のものに目もくれない者の対峙（たいじ）です。主がなされることだ、主のものだとその身を委ねることができる幸（よしこ）いを憶えます。

新小岩教会と川口まな臨時牧師、川口由子音楽主事、李ヒソック宣教師（東京・葛飾区）

25日（水）サムエル記上18章25～29節

人の評価を気にするサウル、主の選びを喜ぶダビデがいます。主に選ばれたはずのサウルが主に従わなかった故に、次第にダビデに対しての妬（ねた）み、憎しみ、敵意に囚（とら）われ、人を恐れるようになります。一方、主が常に共におられるダビデは、主の霊に満たされ、主に用いられる喜びと感謝に支えられるのです。

東久留米教会とジョン・チャヌ音楽牧師（東京・東久留米市）

26日（木）サムエル記上19章４～６節

ダビデに対する嫉妬から殺害に奔走（ほんそう）する父サウルに対し、息子ヨナタンが心を痛め罪を犯すことから守ります。一方、愛情を抱くダビデをも守るため、父サウルにとりなします。それぞれ「主からの悪霊」「主の霊」に心の動きを導かれて、三者三様にみ手の中に招かれて、み業のために用いられるのです。

インドネシア伝道と野口日宇満・野口佳奈各宣教師のために

27日（金）サムエル記上20章41～42節

友としてのダビデとヨナタンの関係が、たとえ離れ離れになったとしても、主にあって結ばれたものへと高められています。ひとえに、ヨナタンの父サウルの私情による思いが、親子関係も主従関係も友情関係もことごとく壊します。しかし、主のみ心を重んじるところには、主の祝福が必ず備えられるのです。

国際ミッション・ボランティアの働きのために（佐々木和之氏・ルワンダ）

28日（土）サムエル記上21章２、11節

サウル王を恐れてのダビデの逃亡が続きます。ノブの祭司アヒメレクのところでは、嘘をついてパンと剣を得る。敵国ペリシテのガトの王アキシュのところでは、狂人のまねをして難を逃れる。主に依り頼まず物や人を頼りにする「不安のとりこ」のダビデですが、神はご自身のご計画のため進められるのです。

シンガポール国際日本語教会（ＩＪＣＳ）のために

29日（日）サムエル記上22章１～11節

サウル王とダビデの亀裂は極まり、ダビデのもとにはダビデを慕（した）う人びとが集まり、サウル王のもとには主従関係による命令によって動かされる人びとだけが残ります。主のみ言葉に従おうとする者は主にある交わりに生かされ、主に逆らって自らの立場を保とうとする者には不安と孤独と嘆きが漂うのです。

ＢＷＡｉｄ（世界バプテスト連盟救援委員会）のために

30日（月）サムエル記上23章17節

地位の安泰に奔走するサウルと、自らを省みず主に用いられようとしたダビデが「別れの岩」一つで仕切られています。ダビデには祭司アビアタルが与えられ、いつでも主に問えば答えられる関係が築かれ、サウルの子ヨナタンが与えられ、「イスラエルの王となるのはあなただ」とみ心が告げられるのです。

ＡＰＢＡｉｄ（アジア太平洋バプテスト連合救援委員会）のために

ＢＷＡ女性部世界祈祷日

（世界バプテスト連盟）

11/4（月）

それぞれの場所・教会で世界中の祈りの課題をおぼえてお祈りください。９月中旬に加盟女性会にプログラム冊子をお送りします。